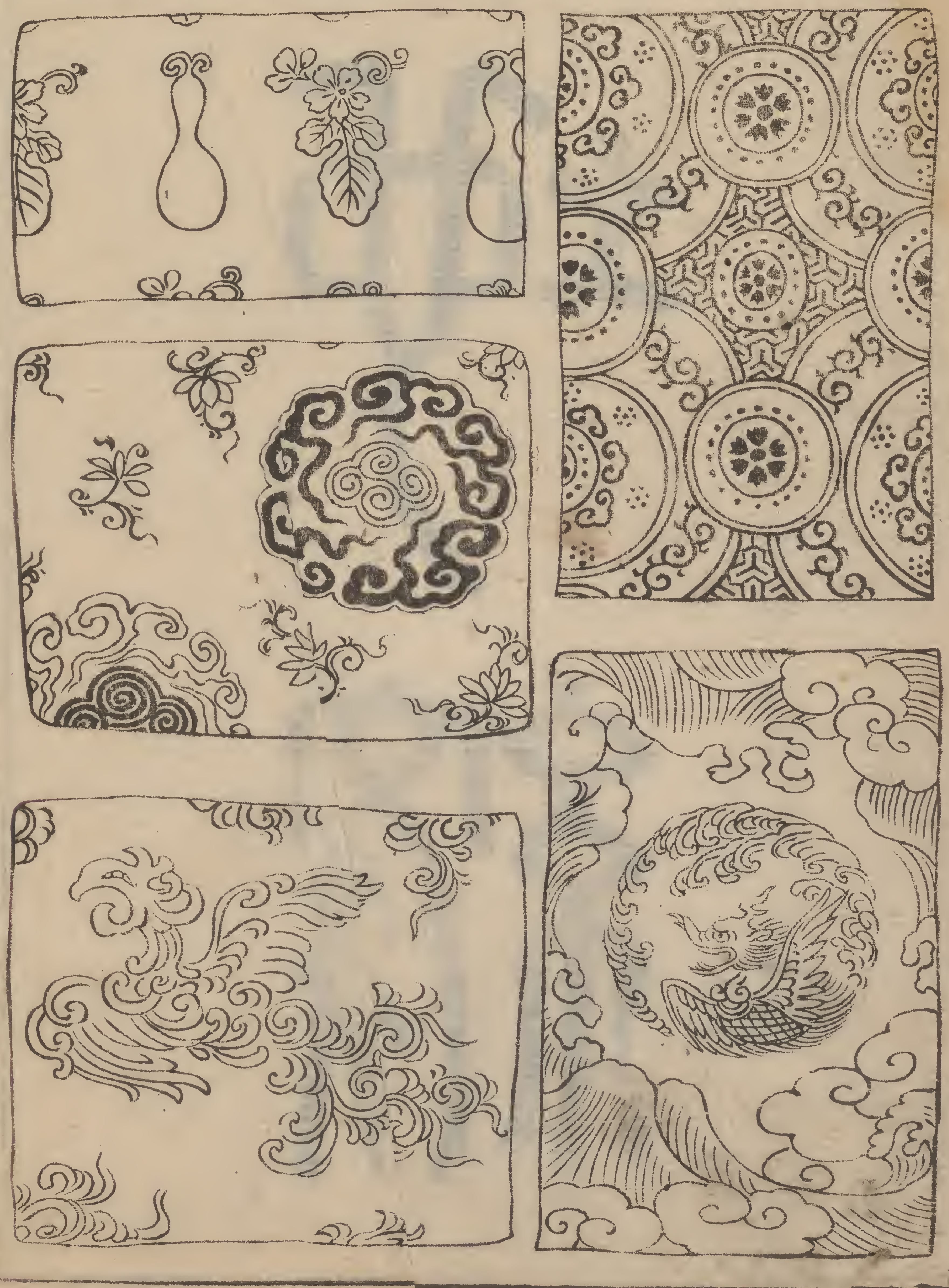
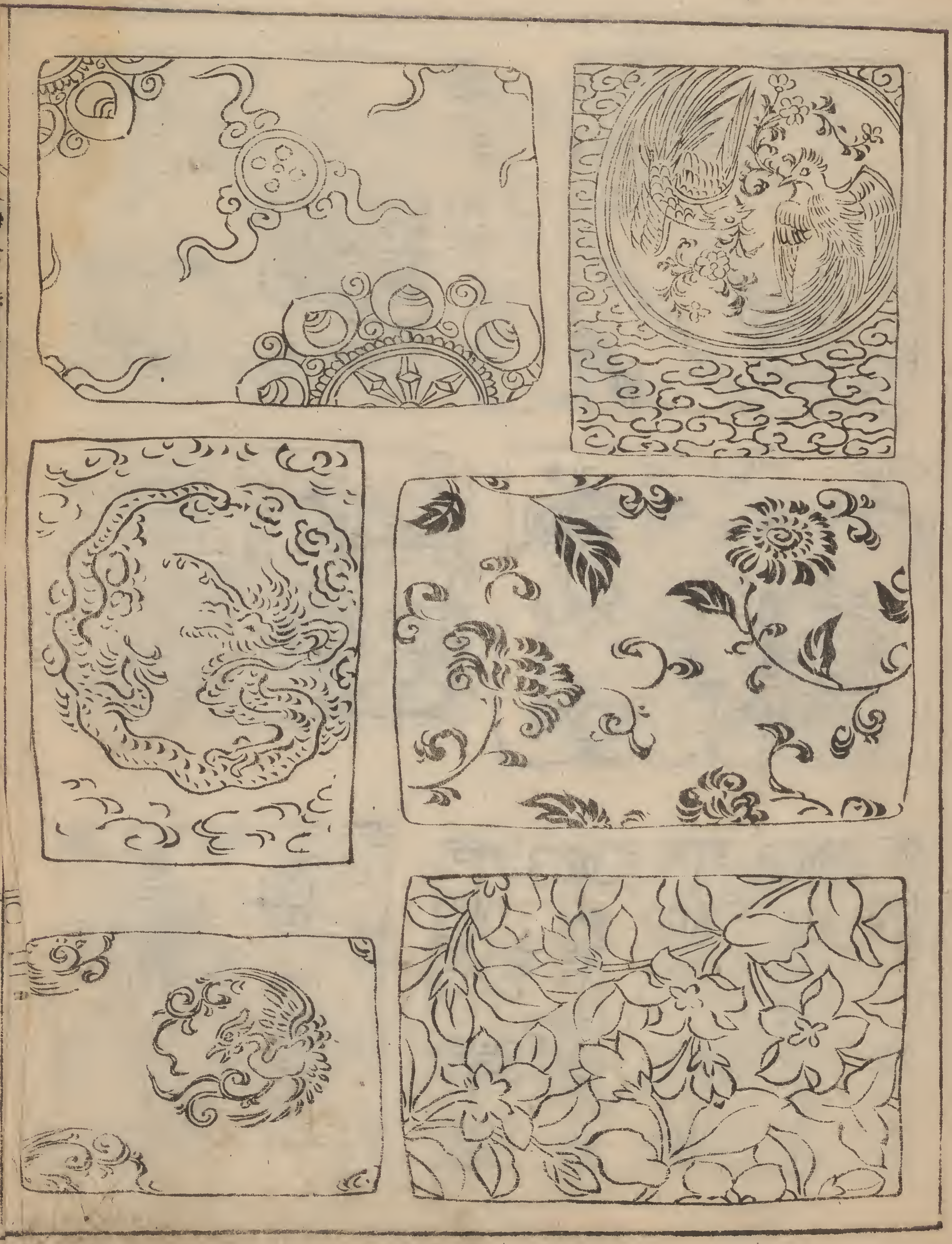
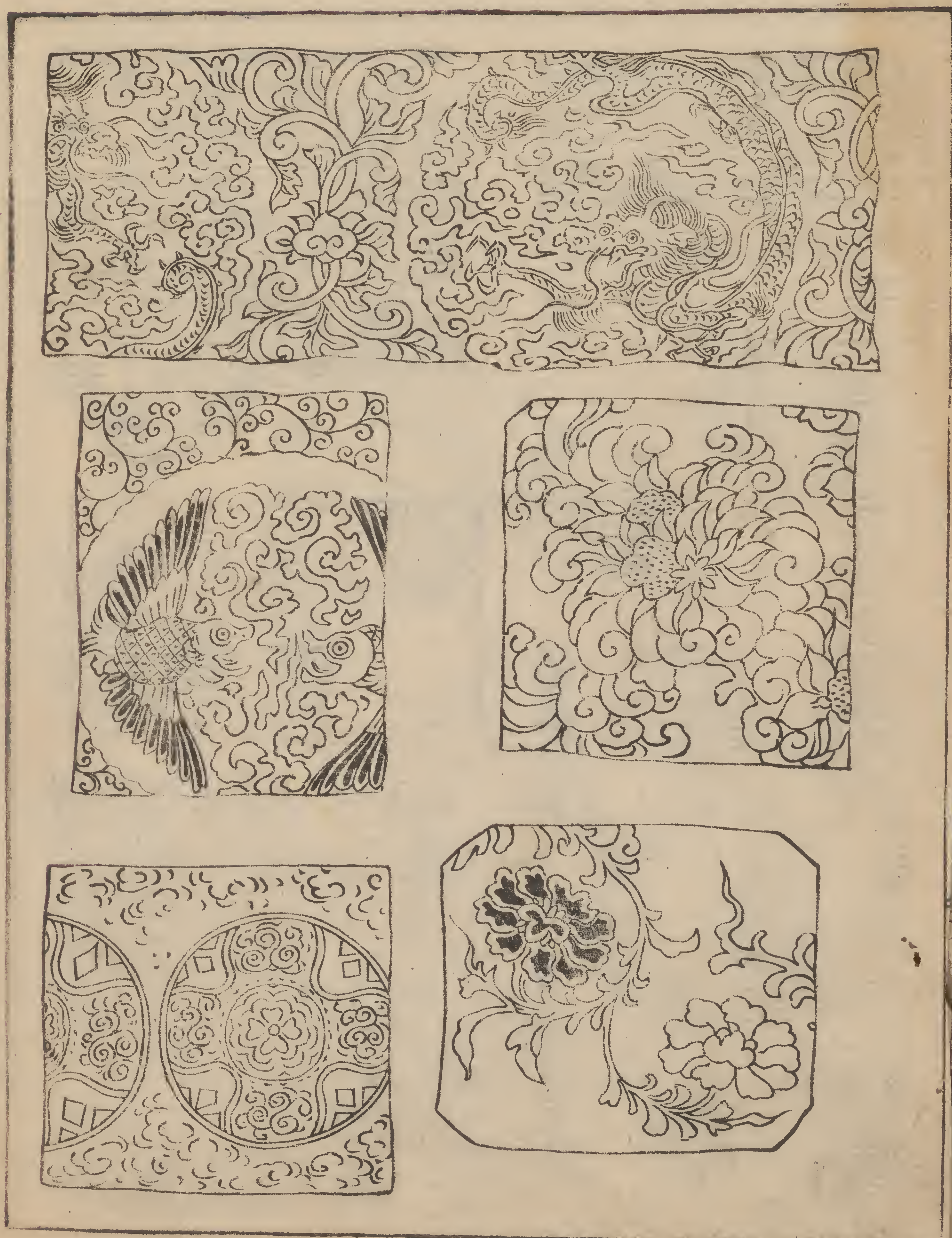
地緯

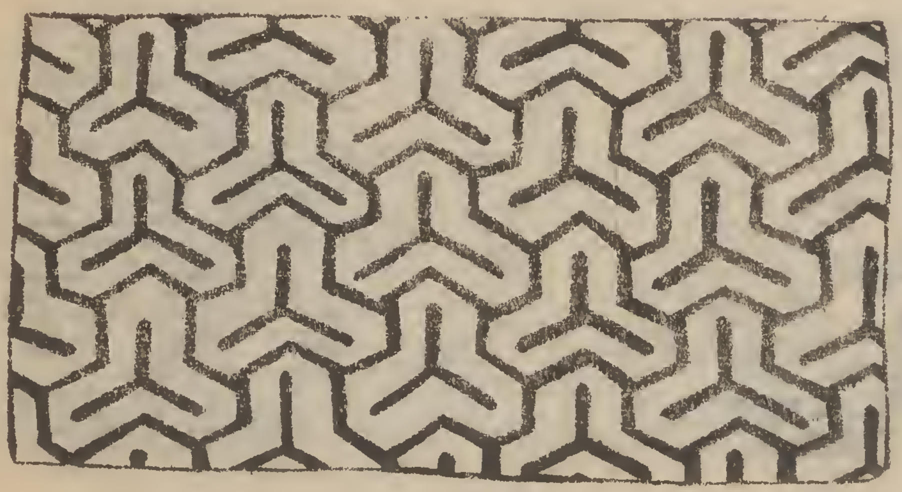
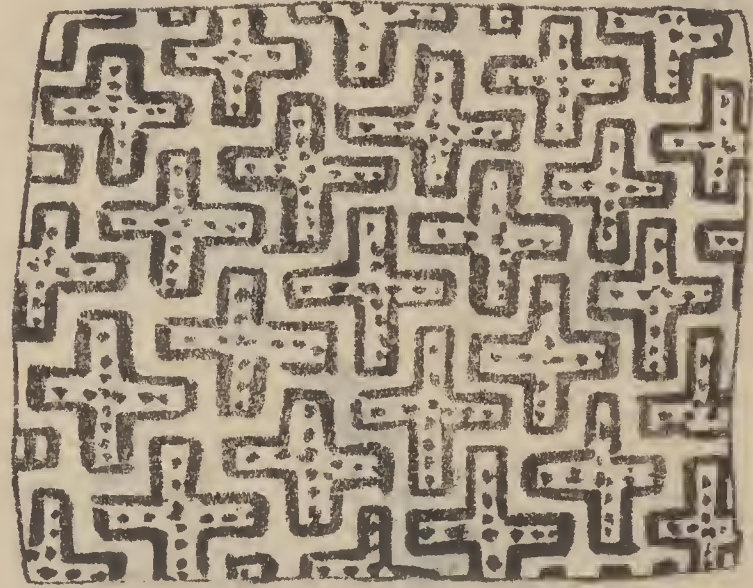
FREER GALLERY OF ART
WASHINGTON, D. C.

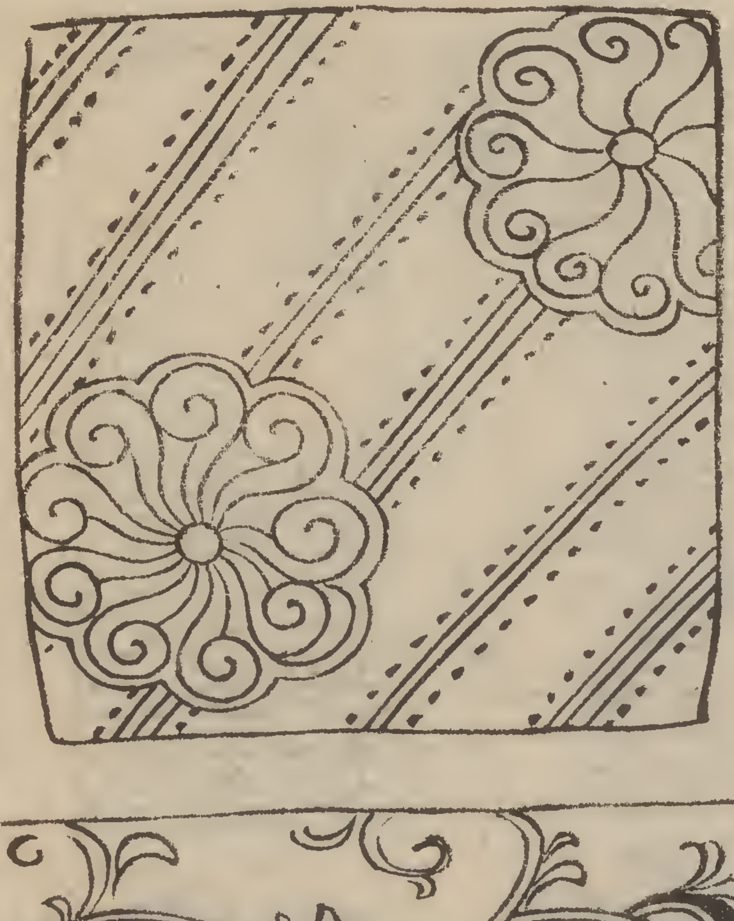
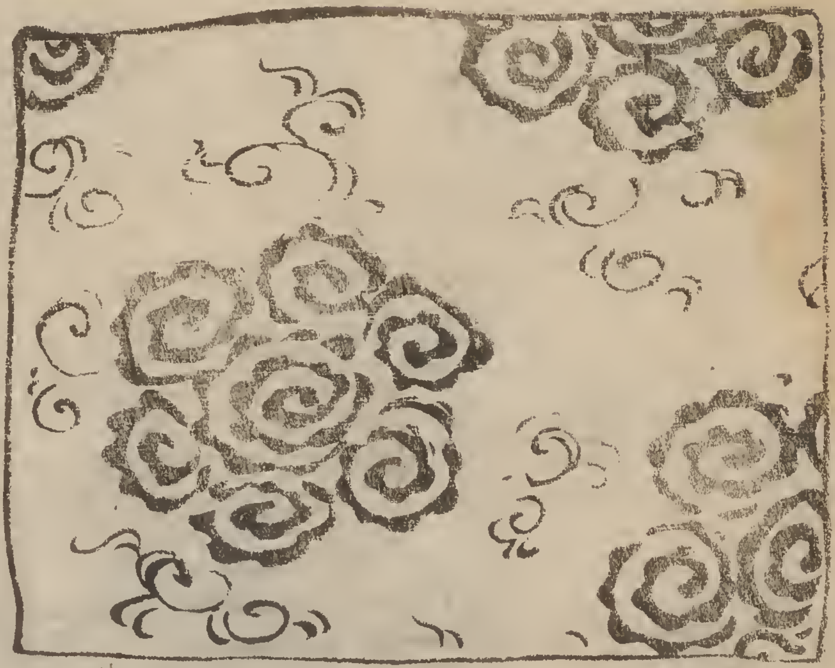
754.Sha

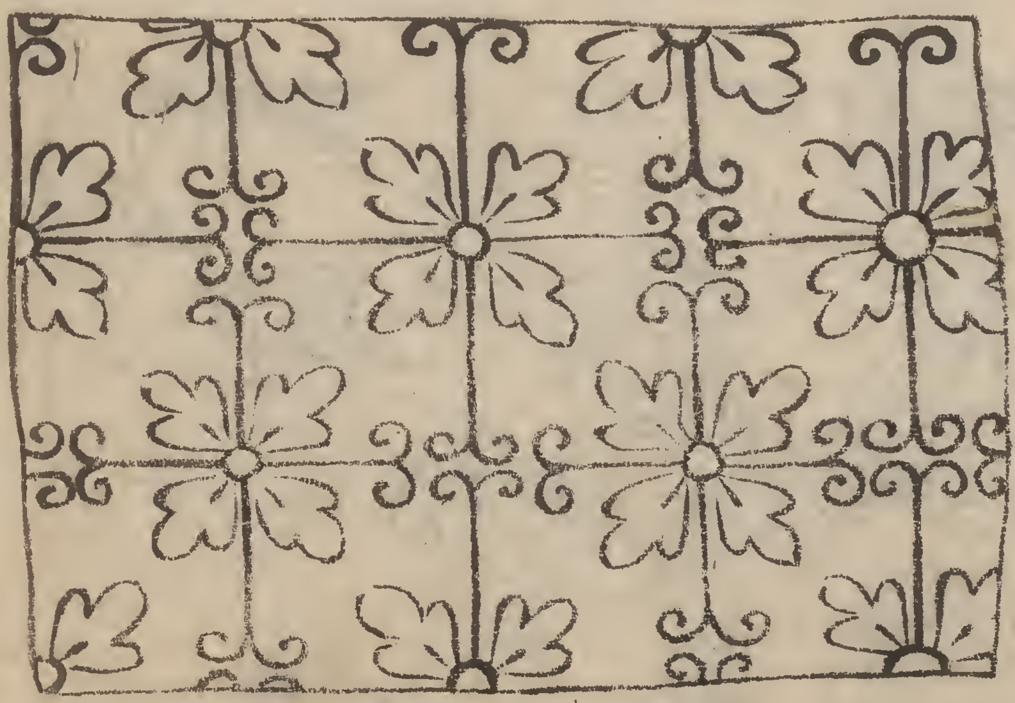


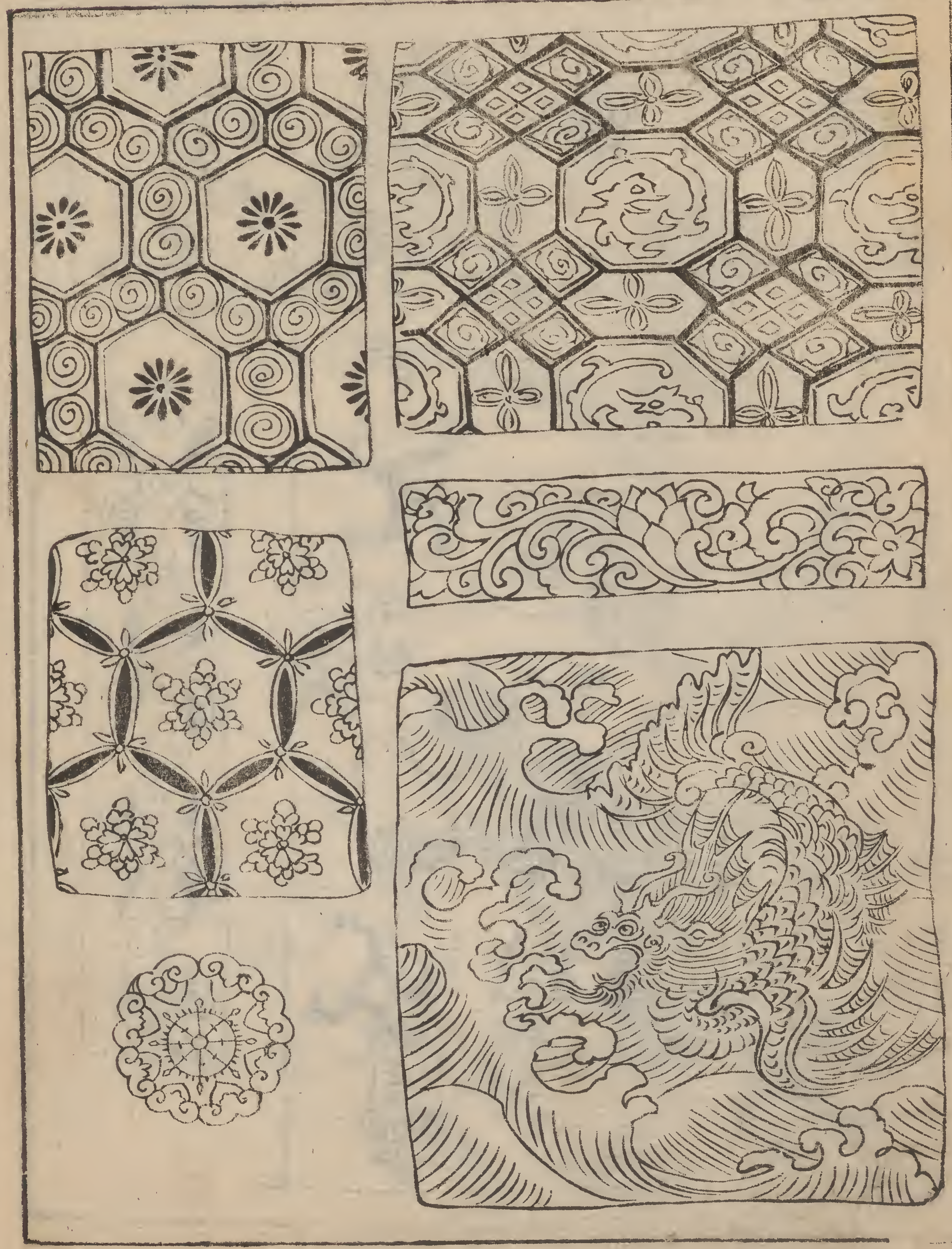


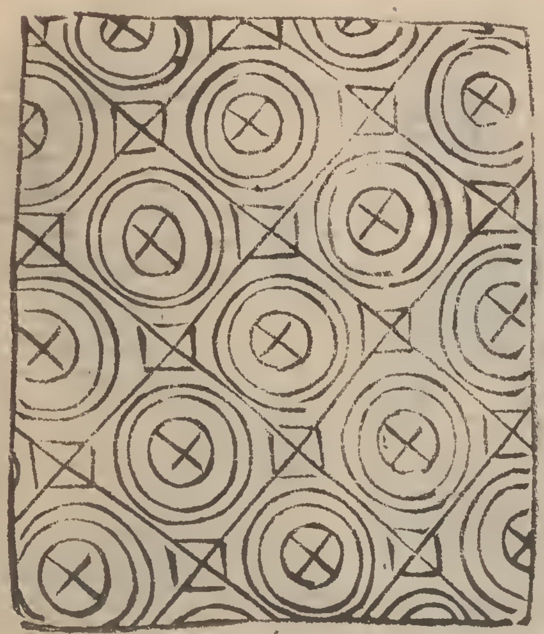


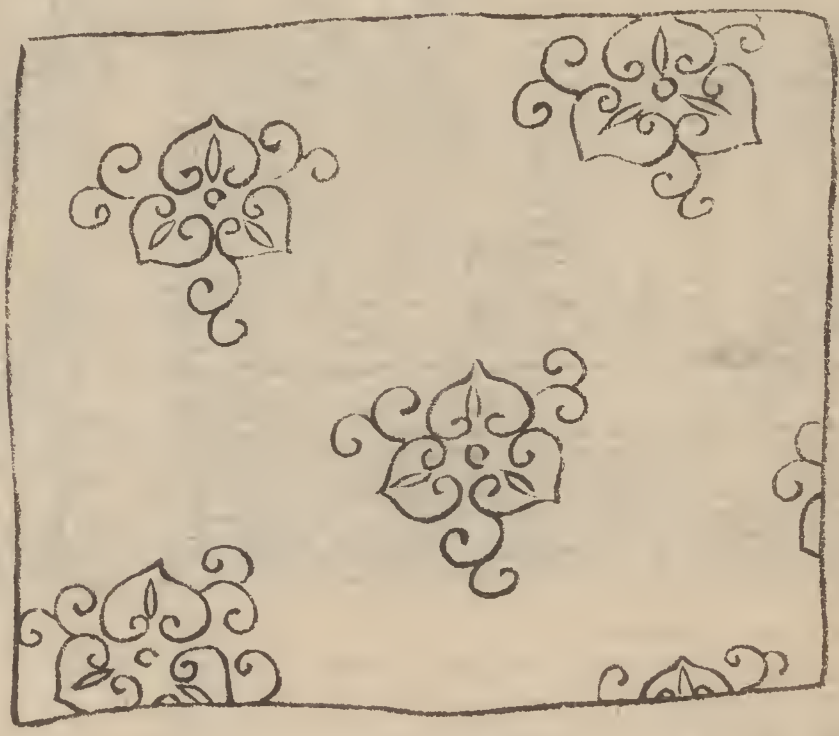



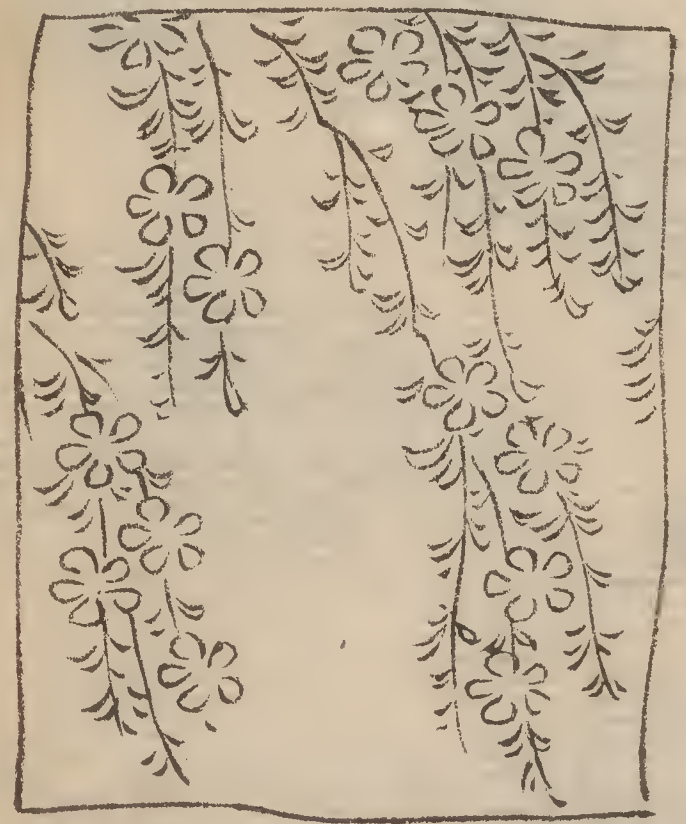
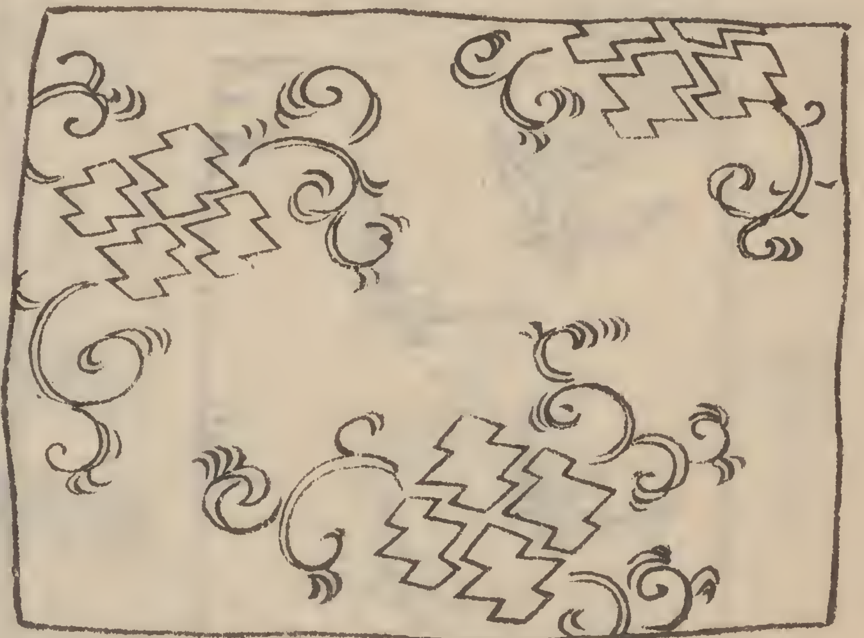
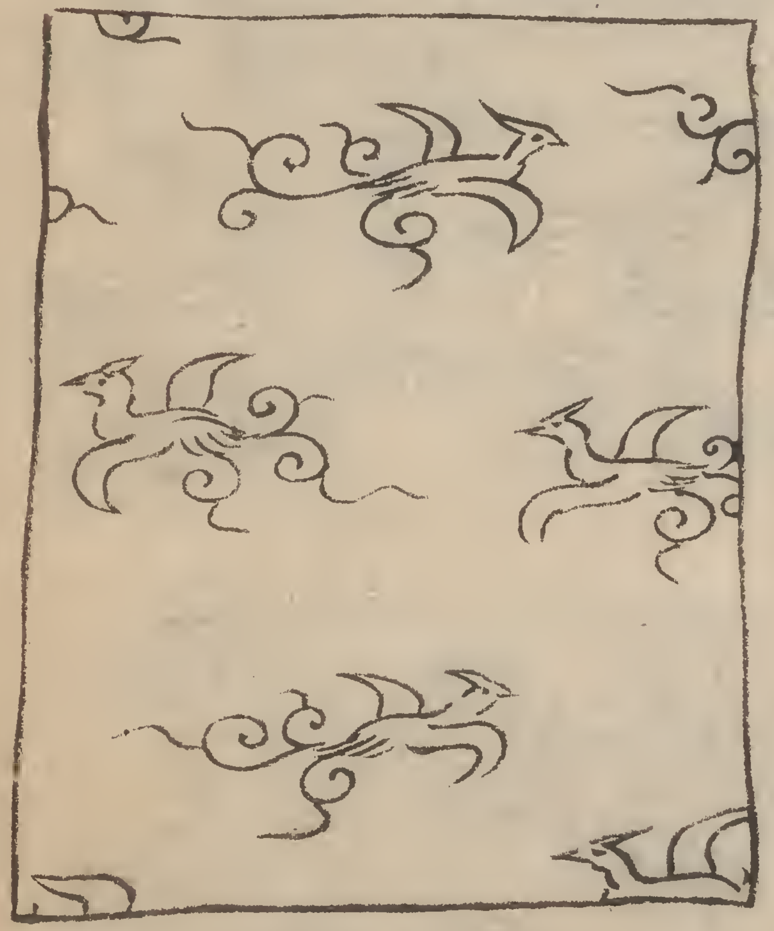


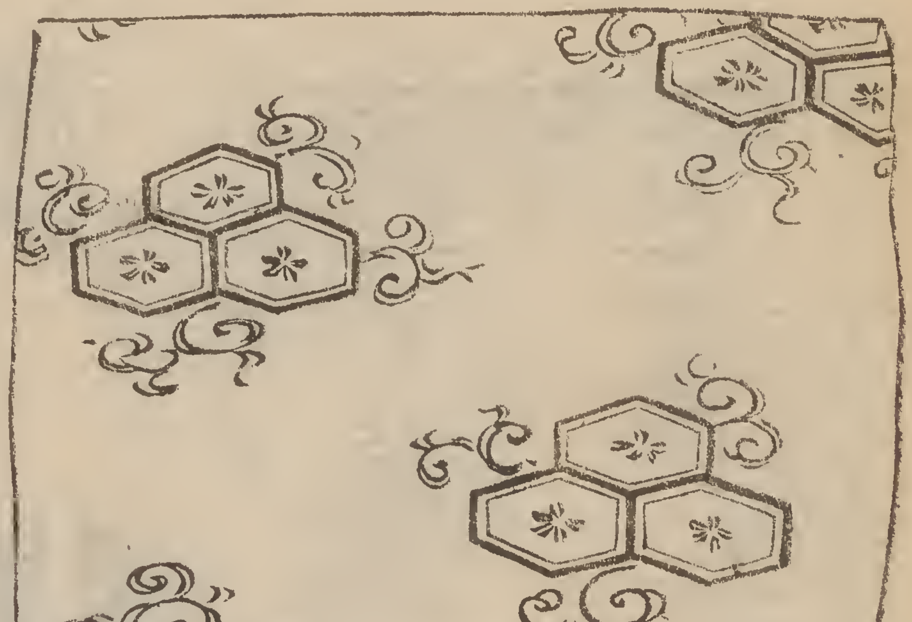


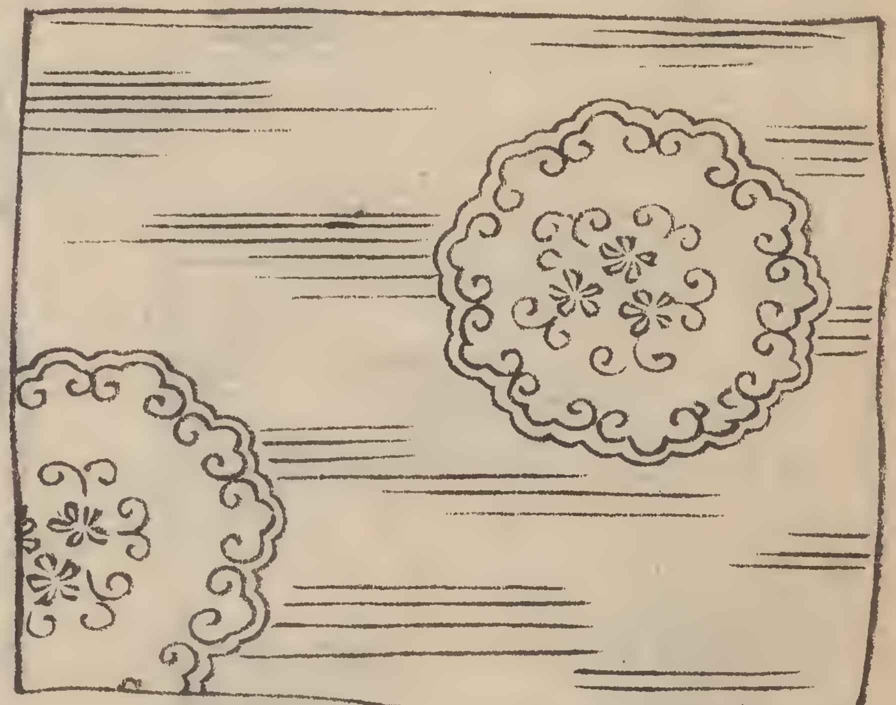


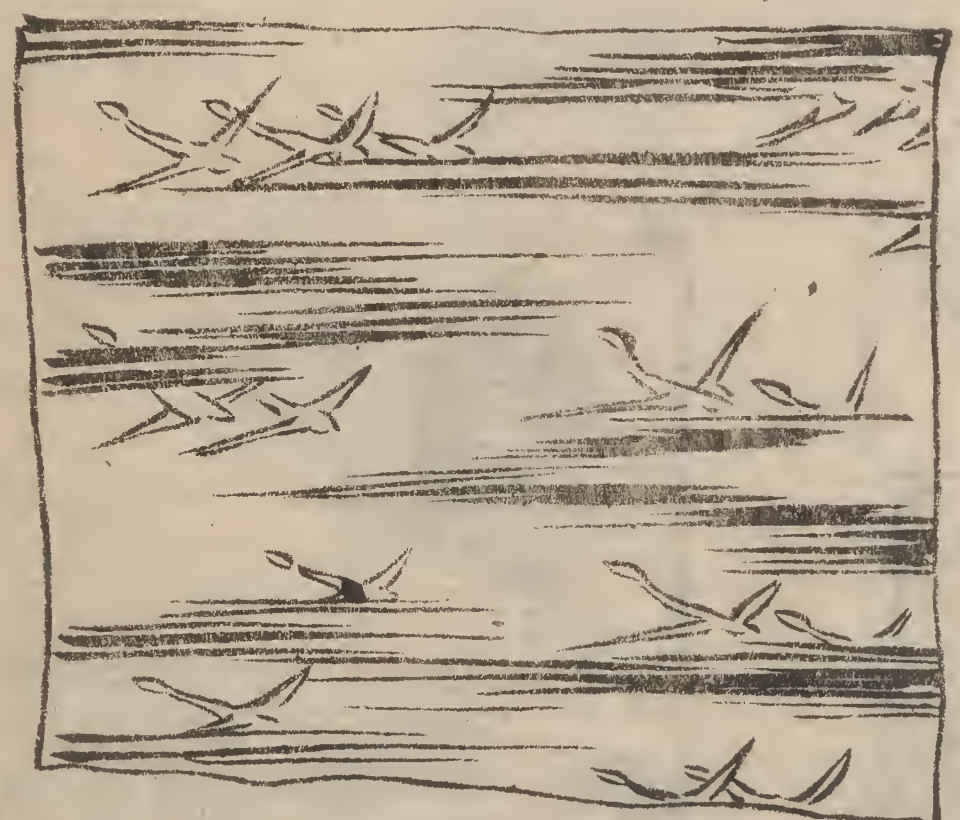
是る和乃地紋三十六貞

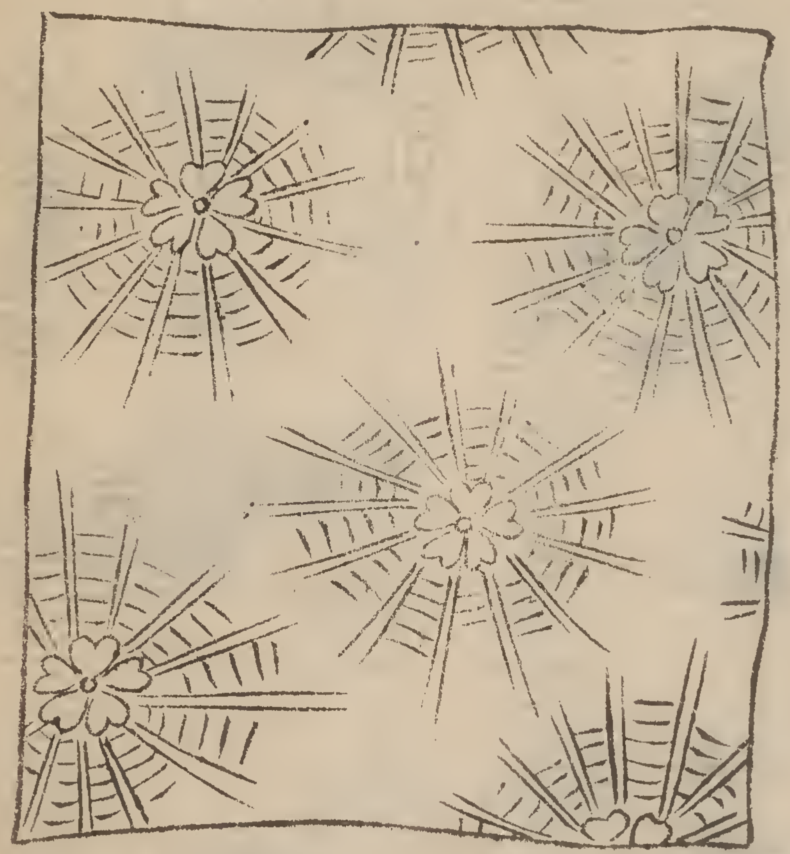


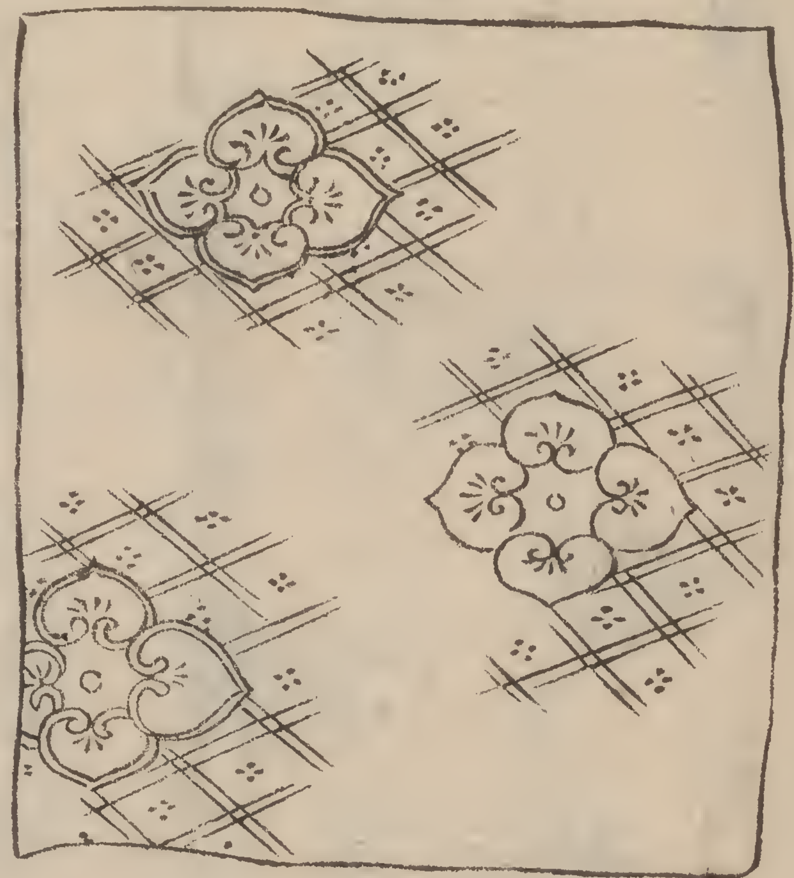




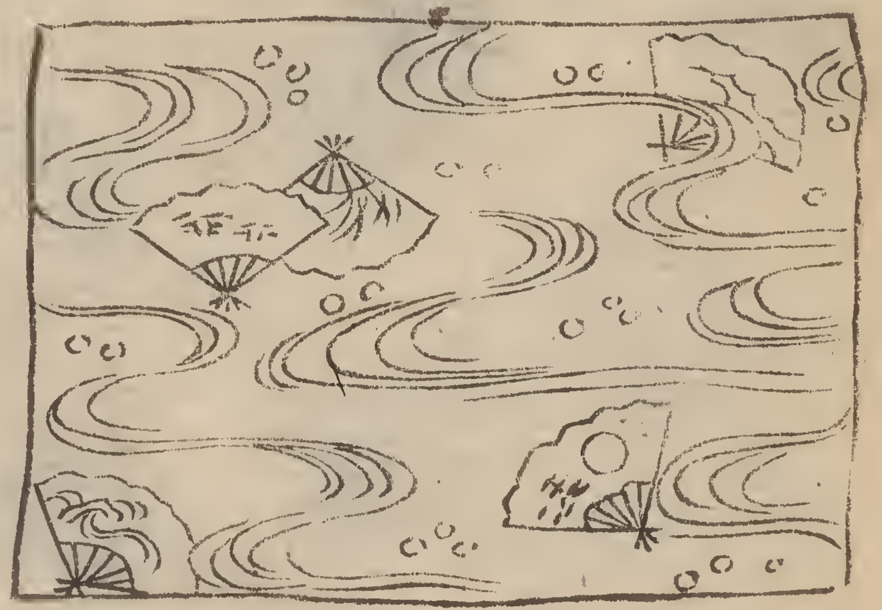


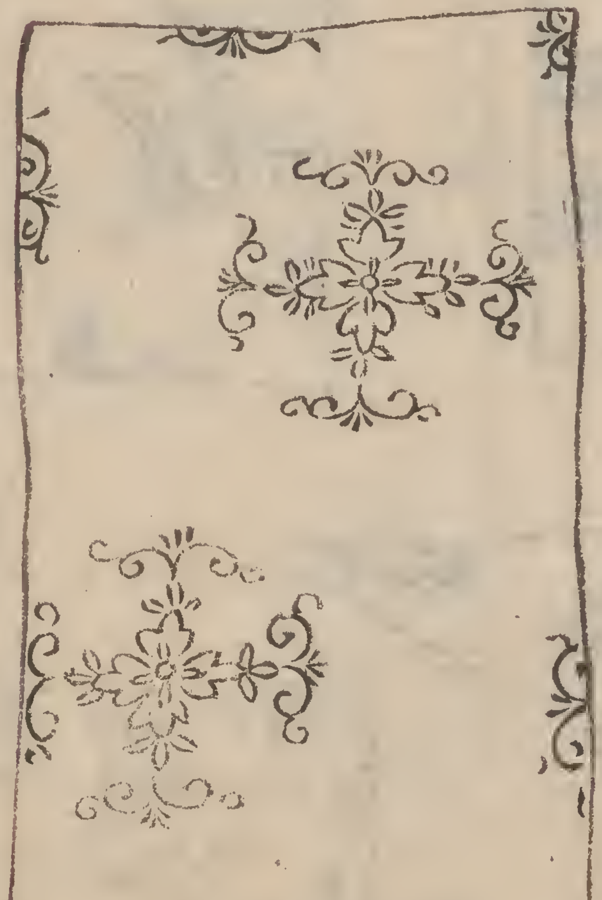


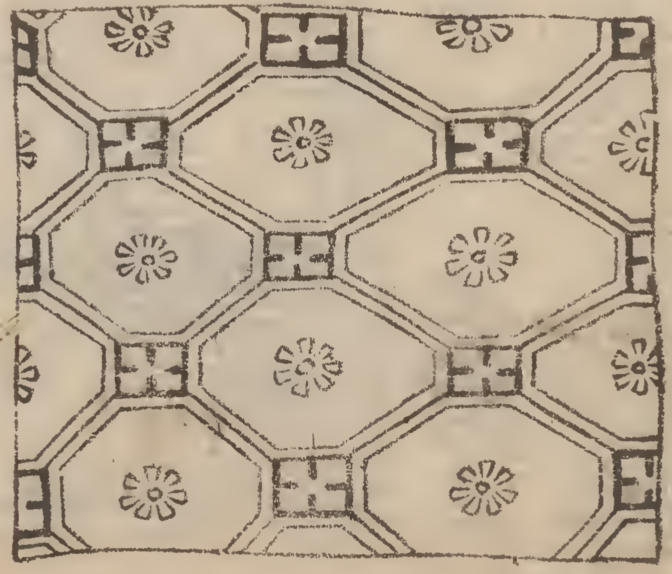












和漢地紋畫終

畫家新舊真偽雜記

○凡古畫を評るに第一の心得あり先己が心能よく備ゑ默沈して利を貪る奸を射けんを離れし僅微も奸利の心を挾むときは真偽の境にまよひて必狐疑を生じて真眼は塞て多し或は其謝礼に迷ひ或は知音の望ゑがごとにより偽とも真と定め又は真をも偽とありへごとし贋畫なれば價物として己が得ん事を欲を先とするよ真偽を究るの眼なくして終には賞鑑の家の名代得る事なし

○宋の米元章が云る蔵下の畫を見ざるは又酒席盃巡

小畫は看るゆゑなれど是四を視の法也又高濂子が清賞
箴失傳の論に云く俗人不知看法便手と托畫背起し
就眼看綃素随く折其口氣て裂て再び補畫し
なし縫ひ貼襯するとも何の益か有んといへり

○

雨雪風煙雲霧黄昏景天ま畫を見るに不須精神
現るゝも紙墨の容質分明ならん殊に佳畫に湿り令く梅
雨の頃ハ黴白を生じて終に綃帛は傷ふといふべし

○

夫畫は看もしなれば先早晨に匣を披き扃帶を以て壁
面に掛初陽は応かし遠く近く視る筆法設色に○は
爲先曽て裱褙せし飾を見るゆゑなれ裱褙の錦繍もし

工は奪れて真贋を誤る事多し贋畫など裱褙を装
て俗眸をくらます是第一の心を用ゆ畫き事也先和漢と
分ち後綃帛を考へ次に筆鋒次に時代次に墨色
次に精神を観畫し印を不見して巻収め後亭先に
再び披き熟覧すべし此時裏志と印章と宰合ゐ
當否をも中に要ふべし

○

畫圖倭漢の相違ある事述るに不及然れども往昔周
文宗丹啟書記の輩専ら浄畫を学びしによりて未練
の人ハ見るに迷ひあり都て浄畫ハ真行草なれども
墨設色甚厚し又落墨をすさびして色を継じく

草花一種の容儀をあり是を無量院といふ皆厚
重あるて倭り邁なり斯を以く倭漢乃間とする
宜し

○

唐朝の絹は廉く厚し搗熟そのうち廣き物は四尺餘あり
宋朝の絹は細く軽く光彩有て紙乃ごとし揩磨す
玉はゞ廣きものは又六尺あり名付て獨抄紙といふ
又元朝の絹も細密にして獨梭に似り和の絹は経
緯細し多くは山城の製也中に探幽子織殿に命じて
別に一種の絹を作る其製甚り勝れり世に是を探幽
絹と云紙は唐の硬黄紙羅紋紙繭毛邉宋の澄心堂白藤

鵠白藤白或は元の清江帋觀音紙明の連七奏
本號を上とし和画にも雪舟紙と云あり乃檀帋
ありはさう紙乃皮を以て漉陸奥或は播州より
出し今はなし山田道安と云人高野山下の紙根と
云所にて四乃為小紙を漉せしり是を道安帋とも云
乃楮紙にて今も簿帳に用る紙に相似たり古扇紙は
雲母漉き唐扇紙に似たるを古法眼の時代帋と云
米元章の神妙能の三不識別ち廣てて天趣人趣
物趣の三科を演すると其帰は一也神不は天趣成べし
妙不は人趣なるべし能不は物趣なるべし莫衒其巧し

○

て天成氣韻あるは天趣をもて先師の規矩を失ふといへども
而形を離て意旨を得るは人趣ありて形の能
物に似るをば專とするを拙趣といふべし
○今俗間に畫は筆法を得ざるを以て本絵といふ是
本末は茶がしく唐土よりも此例あり米南宮乃末畫を
以て市街の壁に貼じ賣せしと云しを本畫に對して
末畫とは云なり末畫は物趣ありて物に似る事を專
とし取にたらず
○畫を看に筆法の形似傳深の外に神氣の有無を考ふ
べし古人の説に三國六朝乃畫を万世の法とすべしと

あり然ども曹弗興衛協より以降顧陸張呉等の代
畫は世に有事稀なり况や文字は千三百年畫は
千年にして皆消滅する故に然に唐宋より此道隆に
奥の規矩を究る者多し故に時代を分て考ふ時は
六朝以前は闇く論ぜず先唐宋元明と考へ定しそれ
畫は上古中世近世當時と分ちし故に宋の趙帝
鵠くこの事あり唐乃呉子は近世の人なれども考
定さは四緒なり唯當世の人の目前に看る所を以て事
分るべしといへども
○時代を分事は安く定し其中に就て誰とする事

別峯 専要なり世の画工ハ其一画の風儀あり
つゆく事なり或ハ其時に当て一人名を得る者あれバ
其風様を不学して自然とおしうつる一逐ある所
和漢ともに同じ然バ漢にハ龍眠の人物李忠訓が林泉
戴嵩乃牛 韓太尉の虎 徽宗帝乃鷹 牧溪の観音
舜挙の草花 郭熙の魚 東坡が竹 高然暉が遠山
易元吉が獣 辛翁の布袋 恵崇の芦雁 雪澗の達
磨 劉宗古が猫 太明 雪窓が芝蘭 陳清波が鐘
馗 汝一子の松 邊景照の小鳥 楊補之が梅 韓幹が
馬 檀芝瑞が叢篠 閻士安が野景 僧日観が蒲萄

丁野堂が蘭 王若水の花鳥 明遠が樓閣 李安忠が獣
虫 周田の栗鼠 所翁乃龍 玉澗が羅浮 長浮休の煙
村 趙子昂の馬 張放汝が牛 與可乃竹 此等の者
枚挙にあり遑あらし其時の人乃勢ひ自然とおのれ
多り和に於ても是に同じ然ども漢のごとく其一種と
なりて名ある事稀し漢に對していへど

○

上古に兆殿司の風 和様に光信風 鳥羽僧正風 浮様
には元信風 次に同門といへども永徳風 次に山楽風 次
に探幽風 或ハ常信風 雪舟家にも風意代々にうつり遷
雲谷家に等與以来の風つたへたり 京師にハ友松中

年明兆の風を兼たるなれ其風今に遠ざかり其後
玉澗の風を縦写し世にふくろ絵といへり故に此意
味ハ京師に遺れり東武ハ惣て古風の様にいふを
古來京に比よりて高然暉が遠山此風のごとく今に見え
たり凡是等を分て亦先師の家風をもて別べし

○古画ハ落墨設色ともに絹素に入て礬水の滲出
映じて草花の類ハ紅ハ胡粉おとし緑ハ碧緑おとし
粉ハ剥膩滑にて玉のごとし墨ハてんじて漆のごとし
水色ハ多く半ハ消して滲くなりて偽ものハ墨滲
素の上に浮て設色ハ偽者力を極て是を成ども

ハ相似たりといへども只紅をのみ好で画れ

○紙絹ハ旧を古とし画て新を今とすべし然ども四ツに
三品あり香煙竈の煤に薫じたるハ其色黒赤し紙に
光ありて黒ずして蝋の色を出さす又山中湿屋風雨
瘴嵐乃陰氣に当て古びたるハ艶なくして色一味に
おとし墨透徹て絹帛に星を点じて麤を打なり
亦倉庫の中或ハ匣篋乃中に貯て古びたるハ蠧衣
魚の為に紙蝕せられ新色形ず帛絹弱し墨ハ苑
よく補筆あるハ具に視を是等ハ自然のふるびなり
偽ものハ屋梁の煤を煎じて薬水として絹帛へ塗る

故に色舊しといへども或は淺黒或は黄ばみ甚多しと
いへども豈其新しからんや能く見わくべし古を
せむとといへり

○印章の事は印泥を古より印章あり和ハ三百年
已前は印有るといへども偶所見るは韋紙の印中に
金字の二字ある紙あるを見れば是疑なし亦菅丞相の金
印有りとも皆倶に取に足らざるべし
凡印に三品あり真印偽印寄印なり真印は印泥の
好醜によらず筆者と印と疑ふべきなきを云偽印は印も
物も名画は印を捺押するを云寄印は名画に印なき

物に名印は印を貼するを云

○古法眼元信は印色を用ひず絵の具に朱を用ひ雪舟は
印色を用ひらざりし勢ひにて朱印色は絹帛になり
て色の変る故に練朱よし印泥を家に用ゆ是有唐紙の
朱色は年経て鮮光なり鳥子紙は黒ミ出る絹地は淡く
なる印色の油分に敗るゝは印新なり陳艾草麻に
或ハ雁油等を以て敷ざる様とすれども印暈を止
事能はず亦絶て悪く絵の具は朱を用ゆるハ印
様常に或は色黒し前は黄色を設るに云がごとく只
紅なるものハ却びいし是は広く印色の真偽は

別而悪しく且又糊背したるものに印肉の力裏まで透
表ハ舊く裏打して新なる物に印肉透る是甚笑ふに
なれバ印色を押て後煤汁を以て染なせハ印の不
どり油氣にて煤をはじく又絵の具も是を以て歴
たるを屋梁或ハ天井乃間におきて煙煤を以て
舊ぶれバ地に遊び墨と共に黒く薬汁を以て
染ずバ絵の具並ハ自然染類様々ありて述り
堪ども是等分明にして見る時は著るしく

○畫に五品あり一に曰自然筆二に曰擬他筆三に曰代筆
四に曰贋筆五に曰正筆なり自然筆といふハ山水はか

人物なにくれと自己の意趣より出て他人の絵本によらざる
己が不見を写しおしたるを云擬他筆とは専名画
或ハ他人の面白き處によりて写するを云代筆とは漢朝
又ハ傳教弘法或ハ聖徳太子菅丞相等の筆なぞと、
又元あり呉江の元瑜と云人ハ宋胡乃名画なりしが
晩年四隣求者多により他の画と名或ハ門人に写させ
おきに己が印章を押く其責を塞和漢其例多く
あり是贋筆と云ハ上に云ル世物なり正筆といふは
正真なりされバ自然筆と正筆と一つに似たれど自然正
筆ハなきも他の絵本によりて写したるにもせよ又自己

は趣意より写したるにもせよ然れども醜きに拘りて疑ふべく
其人の筆に定まると正筆といふ擬他筆と贋筆など
一つに心得て擬他筆は名画或は他人のありしを
き趣向をこらして写したる斗之贋筆は上に云ごとく絹
紙を古く似せ印章をまぜて其画の人よりも劣れるを云
自然筆は擬他筆に対して云正筆は贋筆に対
していふ各別の事なり

○最も手是は淨画の偽筆なり徽宗楊補之或は銭
舜挙趙子昂呂紀等多くは讃詩を加へ絹素或は
墨款讃語印文ともに格好ありて全体に風気なし

倣く功者の目からも是ぞ證手多し時代の相違は
ある画なれども一新和の物なれば偽人も列淨なり
故より吟味あかりぞれを鑒定し補之が梅東坡が
竹子昂の馬等にまじりて徒に付会し趣て風神
氣韻なきものは淨人の偽筆なることを知べし

○画を視究とも古哲といへども容易ならん此は決して
しがたき物は家図をもとむるに若くはなし維肖唐はの扇立
本と云る画者あり其法によりてそれ等なる名人なり
しが或時江陵と云所にて張僧繇が画し寺院の
壁をみて言ひし如くの画とも見なし誠に虚名を得しとその

なりとおもへば其後わざ〳〵纏て再び彼壁をつくるに筆氏
妙なることを見えて始くく兼工なるざる事をしりて寓へり
近代の名手なりと思ひえて探くへってしばらく思惟
するに筆妙なるに泥で面白事限なしやむことを得ず
してひ三度往て看てあまりにその廷く画く神なる
ごとく云所なく物色風韻妙ならざる所なし世に於て
寝食をもわすれ其壁の下に坐し是を賞し事数
日なりとぞ假神の現く面白そのは却て能はにあり
ど名人乃筆は一旦にて看がてし此所をよく推
量観遊し

○師傳に曰畫に八活といふことあり一に活筆二に活帋三
に活硯四に活水五に活墨六に活手七に活神八に活
畧なり一の活筆とは手中に数刻経たる筆は運
ぶによくして又却くくきたなり是を嫌ふ新なる筆
の禿ざる毛有を活筆と云二活帋は絹紙ともに
新なるを云陳は墨水のちつて弱して筆をくするぞを
嫌ふなり活硯は研よごれたる硯は墨の光を失ふよく
洗ひ滌て用ゆべし活水は新に汲ると云旦に汲たる
は用ひず夕に汲ざるは晨に用ゆべからず硯中泡ある
は時に除て新に汲で用ゆべし活墨は用ゆる

臨て旋し研を云墨て硯面あらハ塩気を出さず活
ハ安閑無事より始て手紙用ゆるを云自ら墨を研或ハ
自ら水を汲趣て力を用ひ労する事あられ腕凝滞して
周旋よくならず是を揣ふ法訣ハ神を静めて墨ひと
つめぐり泰然として毫をとるべし微と四体に融眼外
の物に誘るる時ハ筆力ゆるみ清らかならず気韻あることなし活
昂ハ晴天也清朗なるを云墨蒸ならざれバ時に筆
法ならし必ず忽々としてなるものなり是を八法と
云洲を以て之を云へバ偽筆なるものハ八法都てかけたる
盾し偽筆の臨摸ハ古人の粉本をたゞ画して合

写を是と臨摹と云或ハ本紙に重て透写を是と謄
写と云假如筆勢似よりとも墨色及ばざる所あるべし
元より己が図にあらざれバ趣意なし筆真筆我
漫んや

○古画ハ絹帋共地完整にして破砕なく清白なる事
新なるごとしと上品とハ云ず面完整なれども賠襯せしならば
多有と中品とす又破砕して零落片々なると湊遠て
新なる絹を以て綴補ひたるを下品とす

○上品の完整なる中にも亦下品次第あり山水を以て又
上品とし人物小なるを以て是と次とし花鳥是に次ぐとす

獣是に次ぐ價ひを是に準じ知べし

○宋人の繍畫ハ山水花鳥人物樓臺等針線細密に
して針目とあらハさず僅に細糸一二筋を以て縫針を
髪の毛よりも細く精妙なる事云斗なし設色光彩目を
奪ふ筆を以て畫に逆ふ宋朝の繍ハ花鳥人物
の眉目までも織繍となしぬ元朝の繍ハ粗にして多
ハ眉目なりつ墨をもつて點じたり宋朝の落針に及
ばず是をもつて宋元の織繍をわきまへ知べし

○繍畫に印有て名有ものハ多く御府の畫之名あり
印無ものハ是を知べし宋印の跡二三ハ畫者の印

なりむかし印有ハ后世賞鑒の人の印文之或ハ畫號に
半有印ハ符印なり又白印に陰文陽文有澤まで是を
古ハ款識と云て博古圖にいろく古器に款識あり款ハ
陰文凹へこむ者を云識ハ陽文なり凸出たるものを云
然ハ款識ハ印の體にて云絹紙に押てみるときハ陽
文陰文なり款ハ文字白く地朱之識ハ文字朱地白
なり澤よハ多くハ款印を上に押なり陰陽の沙汰にハ
あらず

○部菴竹素房印色方　出文房清事

一欝金 二分　一白芨 一分　一白蘞 一分　一胡麻油 一

一銀硃 一両 一艾葉 二銭

先油をよく煎じ前の三味を入煎じて出る時よく漉し

朱を入かイ白礬ほ加へ艾とよく煎して灰汁を去て上

練綿に包て用ゆ又鵞鳥の羽を煎し碎搗爛し艾

乃代に用ゆるも佳なり

○唐製朱印色乃方

一白麻油 二両二銭 一草麻仁 八銭 一皂角 五分 一明礬 五分

一白芨 二分 一陳黄 五分 一花椒 四粒 一白蠟 五分

一辰砂 三両 一紅粉 二銭

将油於鍋内數滚下皂椒熬て至焦色漉去[illegible]

再熬して酒水成玉下蠟礬等物投く冷埋在内

三日して取出て辰砂と下し乳鉢の内に於て細に研す

千餘遍艾を又幾加へ拌匀ほ為度

右牧溪翁の方也季史長史乃傳にして世に弘まる製也

雪舟及雪村楊月等相次て沙門に多く此方を用ゆ

○高濂子の印色の方

一麻油 一斤 一牙皂 三箇 一草麻仁 八十目 一花椒 四十粒

一藤黄 一銭 一明礬 五分 一黄柏 五分 一黄蠟 五分

一胡椒 九十五粒 一辰砂 二十匁 一臙脂 二十匁 一水花珠 二匁之 四匁

右件を先麻油ほ浸て萆麻子と同熬じて数滚し再皂

角茴椒を入て煎じて水に滴して珠を成ふ如附方に
蠟蘂筒を入て又起しく渣を去蓬艾を用ひ肯こし
て三朱を加へ拌て紅成を度とれ

○倭製朱印色の方

一胡麻油 百目 一生姜 四匁 一唐蠟 三匁 一艾 十六匁
一草麻仁 十粒 一朱 百目

右胡麻油に唐蠟草麻仁を入て生姜を入せんじ生姜の縮しゝみたるをみてあげ鉢上に冷して火気を去つゆ艾を入て研中にて煉れば油の抜やうし此黄じたる油弐拾目に朱を百目入金箔を三枚紅粉十銭入て合すべし

○朱印色の方を知ると賞鑑に一ツあり偽印は朱色の自然と其色備らずして或は鮮に過或は妍にして是の中に至るかひを以て成敗すあるべし

○古に云ごとく真偽は淳和と時代と方角と紙絹と新舊と墨色と筆跡と印文と朱色と賂襯と此十様は筆合て窺看にあるべしといふとあるべし

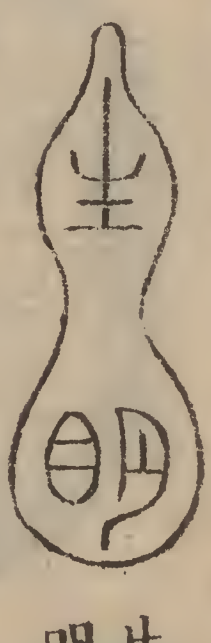
○俗に曰古筆古畫を似せ作り壊能の人ありて其時代の昏を以て深く老まて書画をなせとれは正筆に似しと云是多く俗人の言なりて強て弁ずるにおよばずといへども世挙てくいまは信をなし旅に今是を辨ずる深紙は

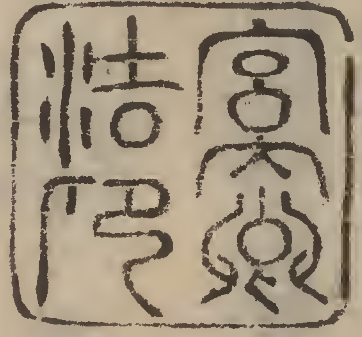
墨を吸ふ紙ふ用ゆるをと難し又礬水を引ど色変ど
塩水ハ光を出を凝藻を是ふ同じ黄蜀葵ハ帋に濃
どりとおを其外海蘿の類引物多しといへども何れも
事とまさどみつ墨ハ何ほど古墨ゆても研時ハ新なる
墨と成り是古木を削ねど趣て紙を用ゆる画
家に百年已来の墨ハ用ひど古墨を用ゆるハ愚なり
雖然俗人え正筆とまる事不知、如何況や偽筆
をや惜哉富家巨室貯の是かしけるを以て多の資
財をおしまど若ふ名画を求て雖自己れ眼力なさ
いざふをとりつく遠く画者を訪し廣く茶客販

家ふ蔵すれども其鑒定明ならざる家ハ或ハ邪
欲なるを挾て密ふ謀をなし其ハ謝礼を貪て其
偽なるを知りながら是を掩覆に因て富家若干の財物
を擲て是を求むなり飽まで真物也とおもひたりて
花晨月夕賓客ある毎にかならず是を誇示を貴
價ふんくらしさるかおもふふよしなきものとなれハ嘗へと
掲て賞美称し人ゝも従ひて只なんはふ讃稱となるを
偽一人真眼を備る者あらバ口外ゑ出さとといへども心
中嘲哢せん事幾何ぞや是一人の誤従より万人の
あやまりと成勝家珍とおもて後葉に伝へ己が恥と

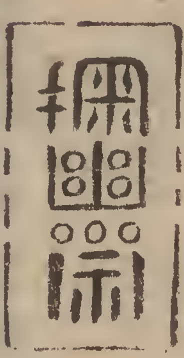
子孫までに及ぶ事痛ましきは非や甚のことならん
事ふよりて身の為に鬻ことを隠て偽物をうる
露も恥ることなし世間よ此類まゝ多し只具眼君子
によく〳〵吟じ幾回も賞鑒あつてもとむべし
者も利欲を離れ賞鑒して名を求べし

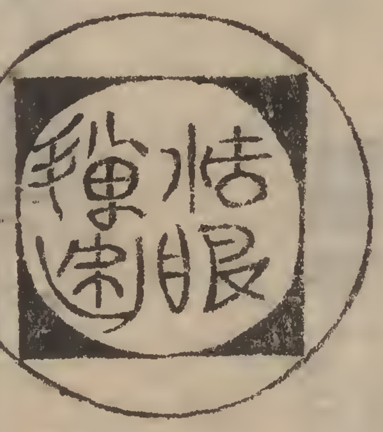
探幽法印行年六十九歳筆


生明

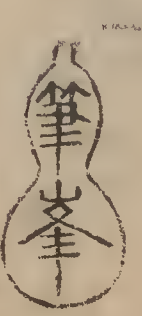

宮内卿法印

法印探幽行年六十六歳筆


探幽斎


法眼探幽

白蓮子


筆峯

印中不見

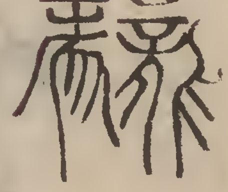
探幽法印行年六十七歳筆

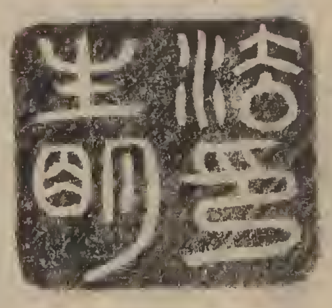
狩野右京進守信筆

探幽法眼筆

探幽斎筆

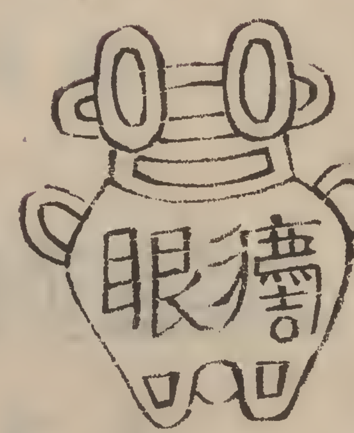
守ノ字

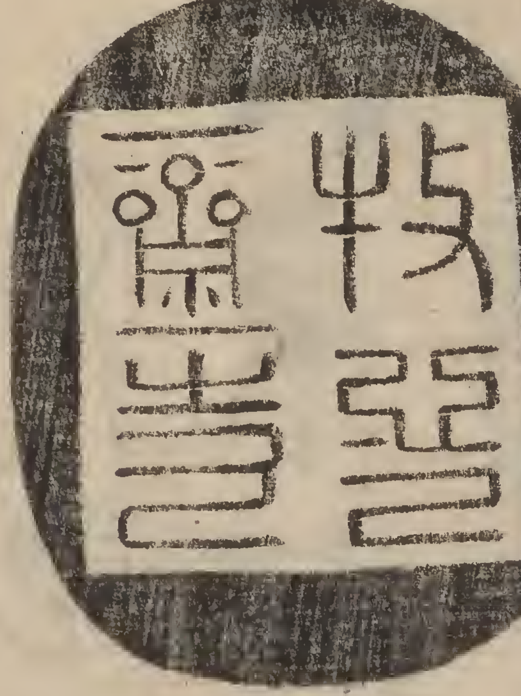

龍馬


法印生明

生明

法眼永真筆


濃眼


牧心齋之印

牧心齋

法眼

法眼永真筆

牧心斎筆

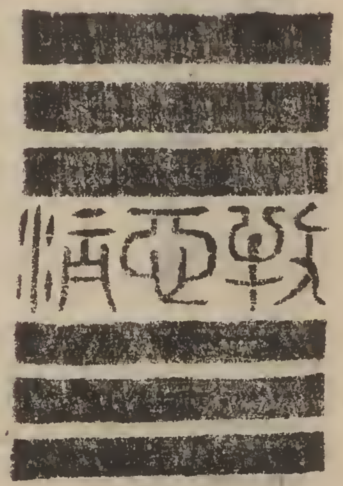
狩野

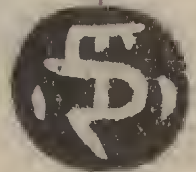
狩野

此印万宝全書出

藤原

安信筆

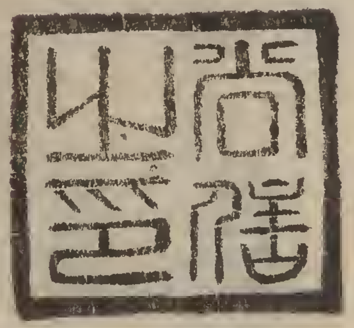

牧心齋

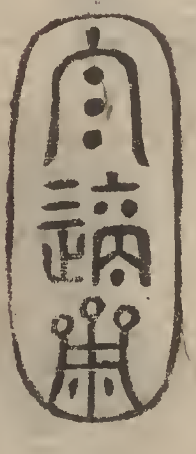

印ノ字

右京安信

自適斎筆

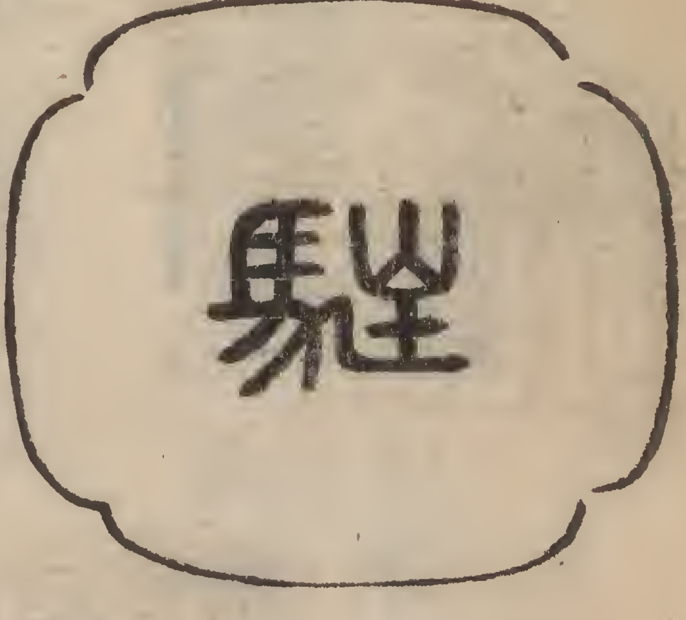
自適齋字


尚信之印

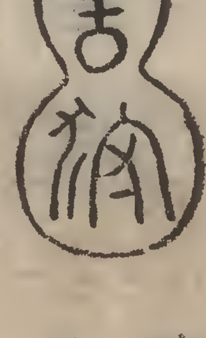

自適齋

尚信筆

尚信筆



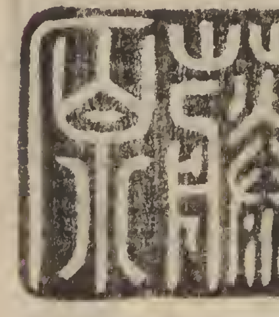
主馬



隷書 未孚

狩野探信筆

狩野探信筆



藤原

藤原

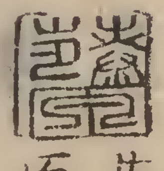
狩野探信守

忠淵

忠淵

探信筆

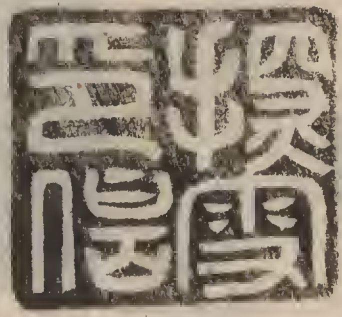
忠信



藤原

探信守

狩野探雪藤原守定圖之



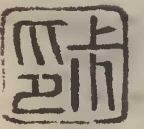
探雪 印信イカヽ

狩野探雪圖

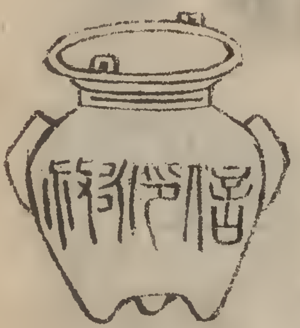
探雪

永叔明信筆

主信書



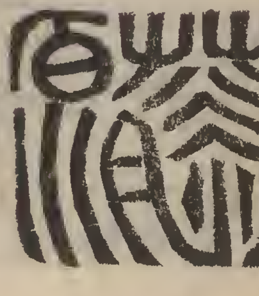
藤原



信印永叔

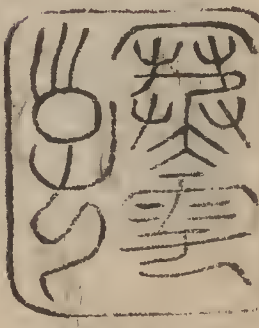
常信筆

法眼古川叟



藤原

藤原

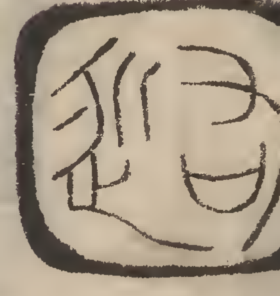


寒雲子

法眼 羪朴

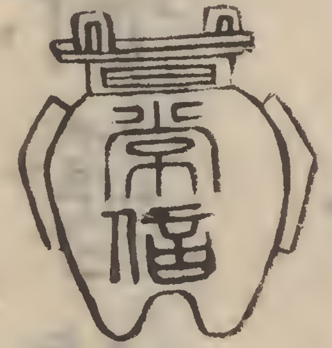
常信

常信之印



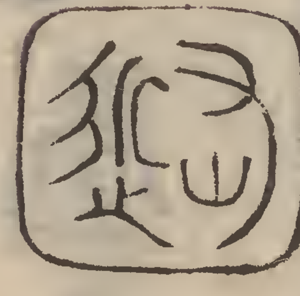
右近

常信



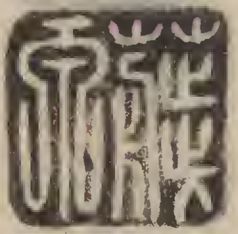
同上

養朴

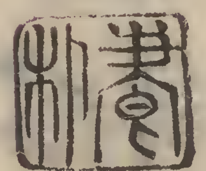


右近

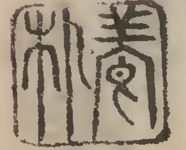
法眼古川叟筆



藤原



養朴



同上

狩埜

常信筆

常信

常信

常信筆

常信

洞雲益信筆

洞雲筆

益信筆

藤原

藤原

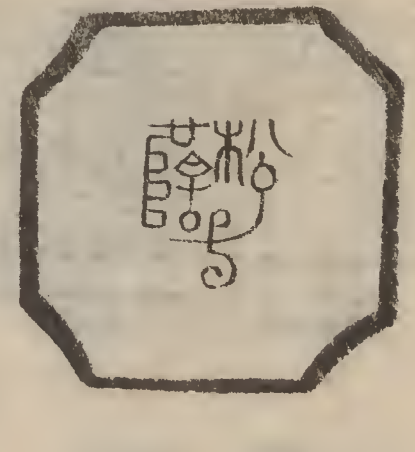
藤原

益信筆

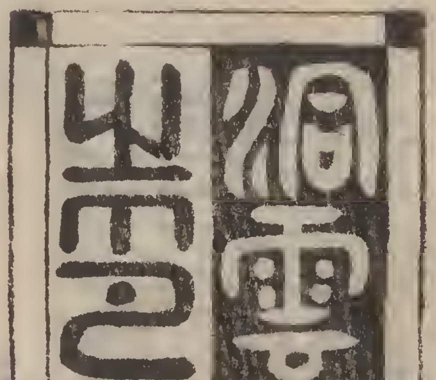
洞雲筆

益信画

洞雲筆



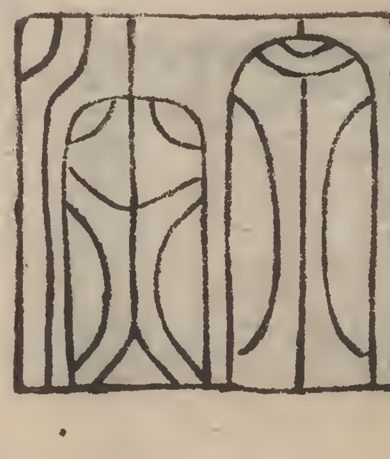
松蔭子



洞雲之印

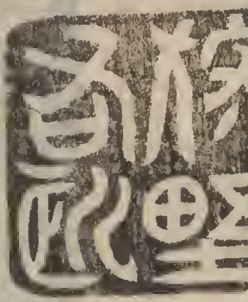
益信筆

益信筆

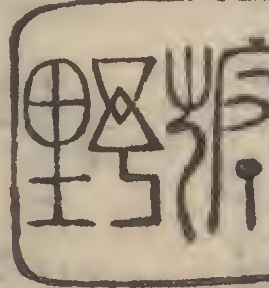


印中不見 ミエス 返らこ仄

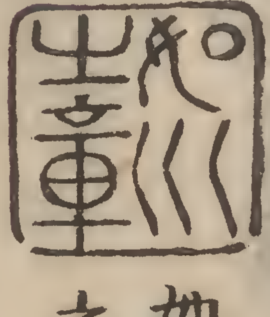
法眼如川藤原周信筆



狩野右近

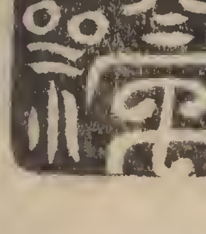


狩野



如川之章

太寓齋



太寓齋

狩野周信

如川章

狩野周信

藤原

周信毫

法眼如川行年六十七歳筆

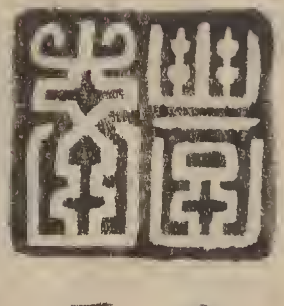
如川章

狩埜

周信筆

如川

岑信筆



豊豆

狩野

狩野

岑信筆

狩野

岑信筆

素狩筆

鈎雪之印

鈎雪筆
素狩筆

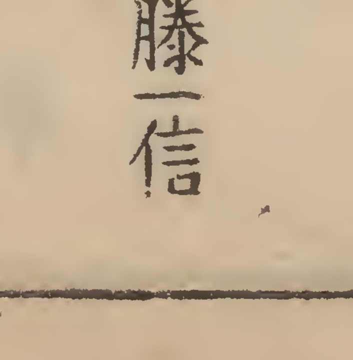
藤原氏信毫

狩野

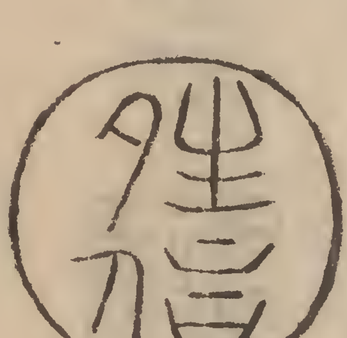
藤原氏信筆

藤原氏信亳

藤原


藤信

休圓筆

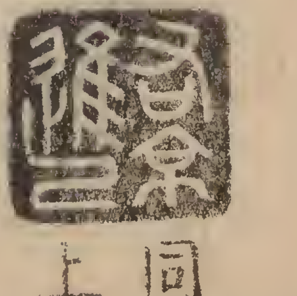


書畫落款覽　六

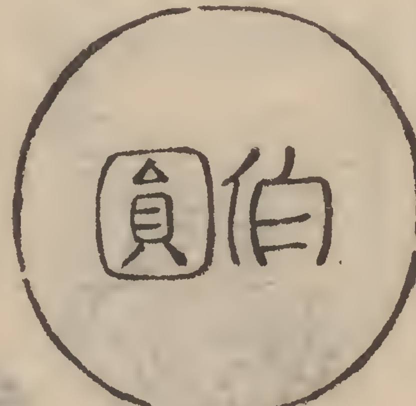
時信筆

右京進

時信筆


同上

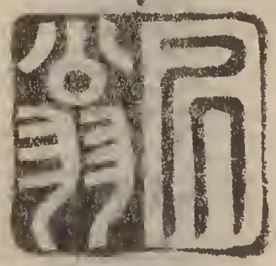
伯圓筆


伯圓

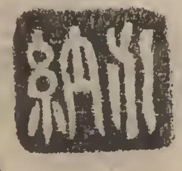
藤原

西邑居翁散人狩野永納筆

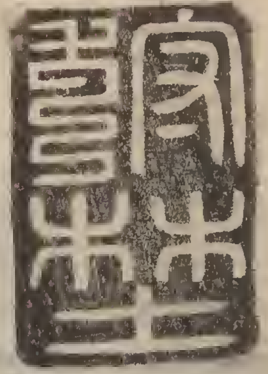
永納筆


居翁

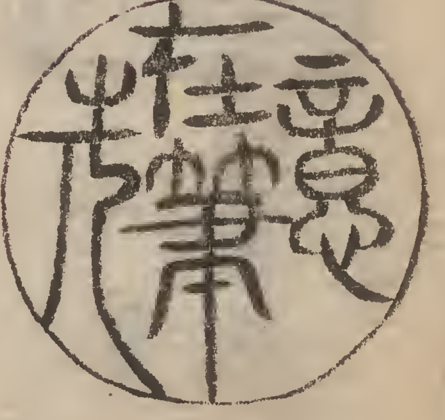
一場永納


永納

一陽齋



狩埜



意在筆先

仲簡子永敬

仲簡

永敬

幽賞軒

縫殿助

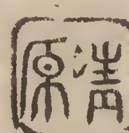
素川筆

信政筆

外記書

清原氏女雪信筆

清原



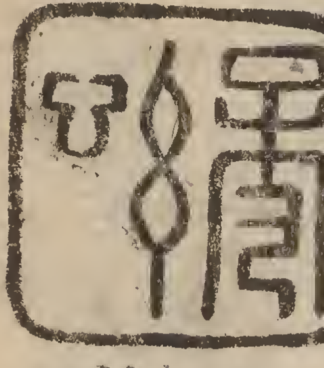
清原

雪信

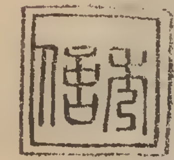
清原氏女雪信筆

印中西村方盛ト有リ夫印ハ用多シ未考

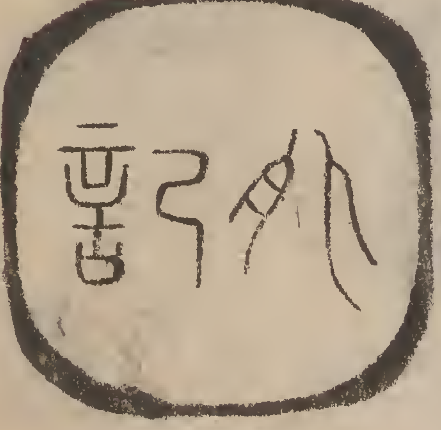
秀信筆



秀信

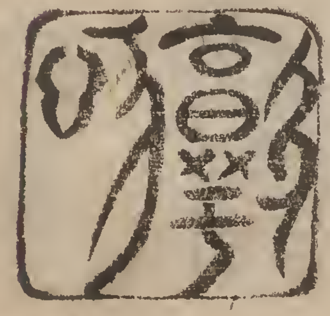


秀石筆



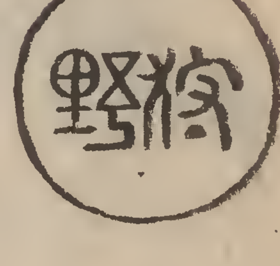
外記

秀石筆



敦信

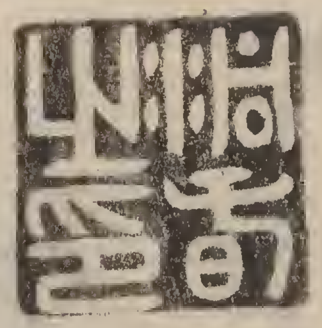
重信筆



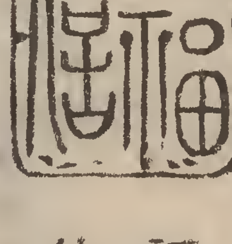
狩野

内膳

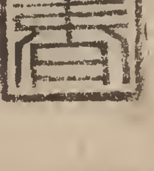
洞春筆



洞春之印



福信



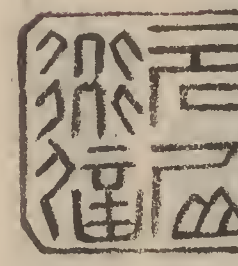
洞春筆

福信

狩野洞春筆

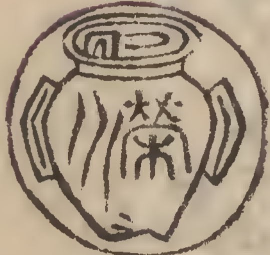
元仙方信筆

印中ハ道信
銘ハ方信



元仙
道信

古信筆



榮川

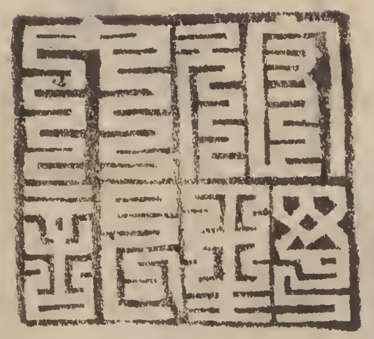
春笑筆

梅

狩野梅春筆

梅春

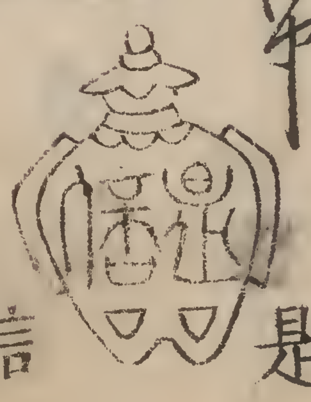
休山



狩野
内記

是信筆

休山印

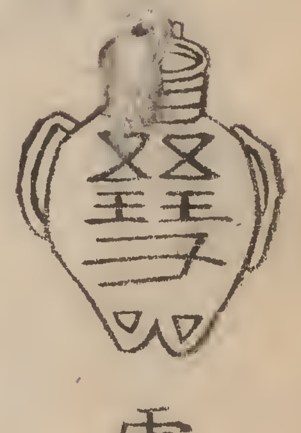


是信

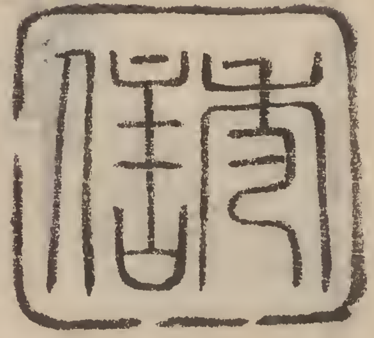
法橋尚景筆

尚景

狩野宗信筆



雪



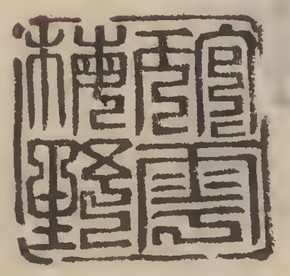
秀信

柳雪筆

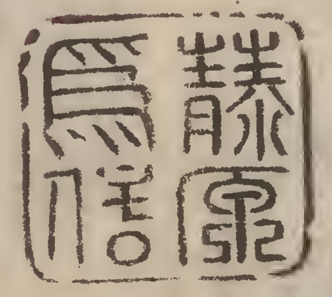
柳雪筆

紫峯

梅雲筆

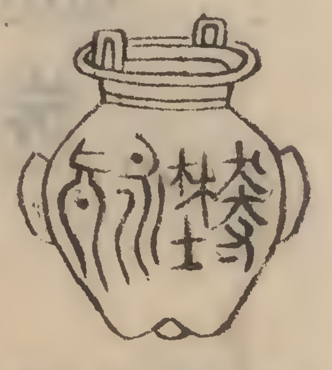


狩雲 梅野



藤原 爲信

狩野永真畫



狩埜永眞

憲信去

狩野 主人

春信筆

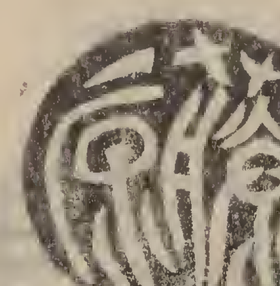
青齋 柳

隨川

梅軒

梅軒筆

狩野梅軒筆



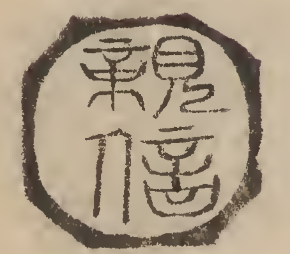
藤原

玉燕筆

秀信筆

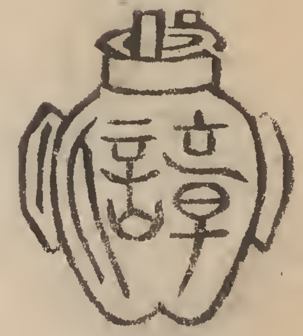
狩埜

親信画



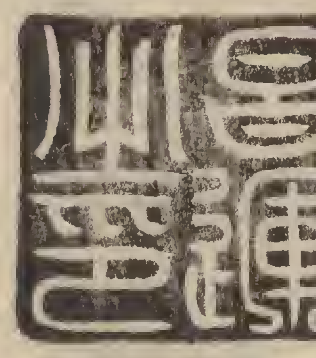
親信

探船筆

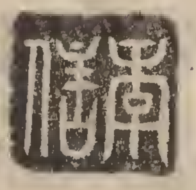


章信

昌運季信



昌運之印



季信

狩野昌運筆

法橋狩野友元筆

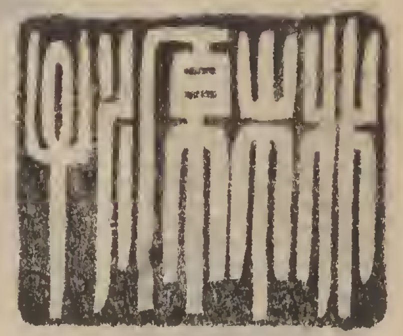
章信之印

景信筆

景信

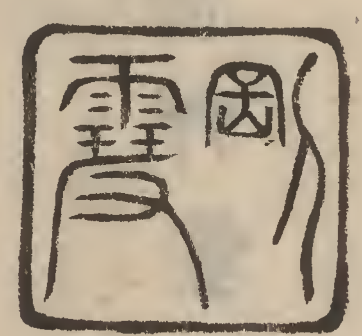
景信筆

狩野山雪筆

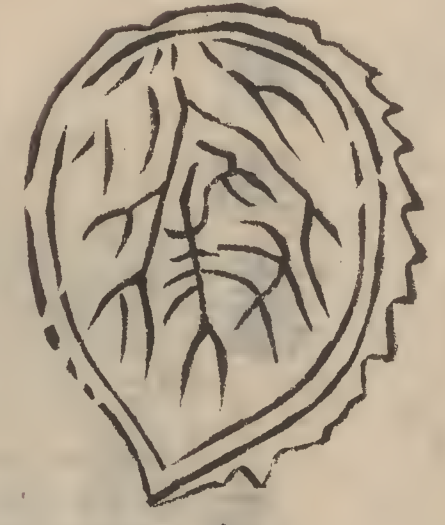


桃源子

剛雪行年八十一歳畫之



剛雪



壽静

壽静之印

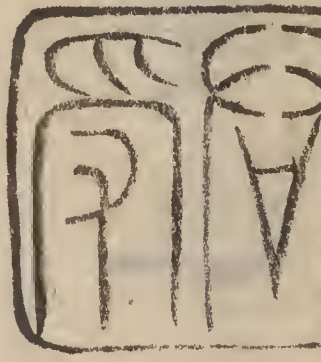
壽静

剛雪

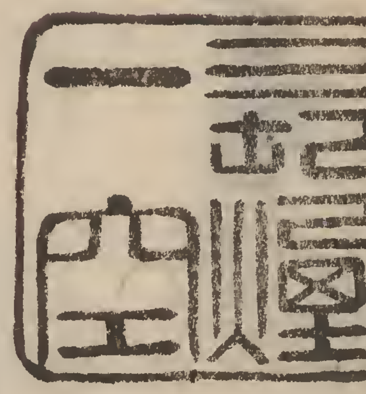
英一蝶書

薛國球印

君受



君受

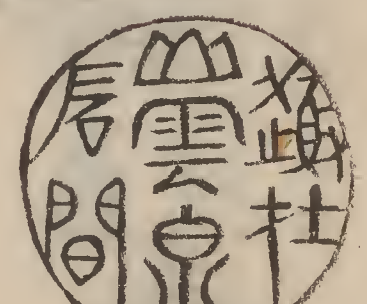


長煙一空

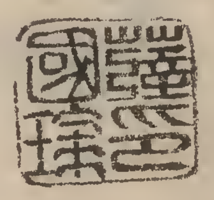
中北窓悳

舊州堂里人

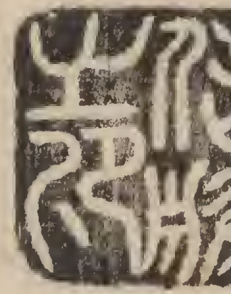
李朝湖書



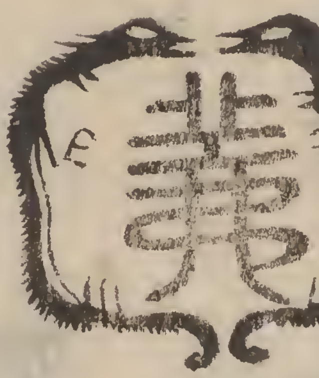
趣在山雲泉石間



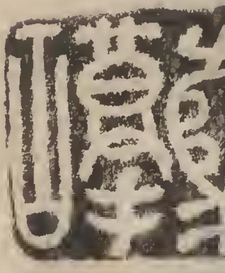
薛印國球



信勝之印

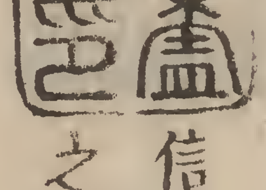


義



宅雄

小岸一蝶書



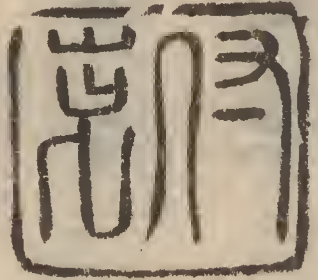
信盡之印

英一蝶書

鶴澤探山

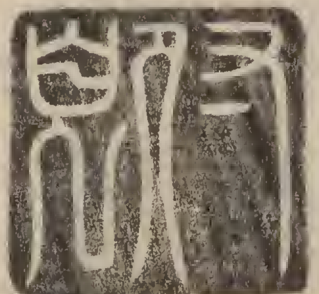
法眼探山

付見

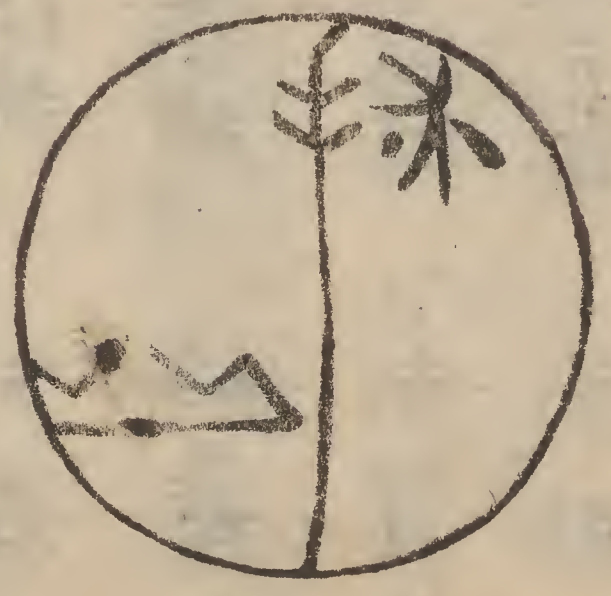


付見

付見



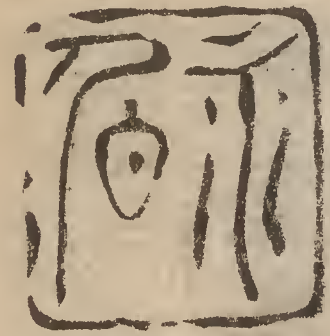
付見



探山

探山

狩野山亮斎

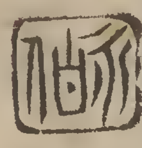


永伯

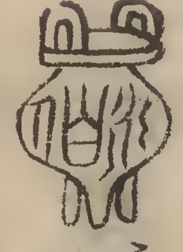
狩野山亮斎

狩野氏

永伯



永伯



永伯

諸國狩野家相續名寄

狩野永真跡　憲信
同　探幽跡　探常
同　養朴跡　甫信
同　洞雲跡　元仙
同　春笑跡　春水
同　休伯跡　玉燕
同　休圓跡　松林
同　伯圓跡　伯清
同　梅栄跡　梅春
同　柳雪跡　柳溪
同　梅雲跡　梅軒
同　安仙跡　友甫
同　壽石跡　伯壽
同　春湖跡　春賀
同　洞元跡　洞琳
同　山樂跡　山亮

右当家之氏族代々雖仕於諸侯者也門人雖有請狩野氏者不濫許之假令容之る其身限之定以誓文行之者也

洛陽畫工
狩野山亮斎永伯

元文五庚申年閏七月吉旦

彫工　大坂内久宝寺町　村上源右衛門

書林　大坂心斎橋南壹丁目　敦賀屋九兵衛梓行